

# 継続的国際比較調査から見えてきた 日本の大学教育の特徴と課題

私学高等教育研究所 第85回公開研究会

国際比較調査からみる日本の大学教育

2026年2月2日

山田礼子（同志社大学）

# アウトライン

---

- ・コロナ時代における大学授業の国際比較とグローバル・コンピテンスの習得状況
  - ・アフターコロナにおける大学授業の国際比較とグローバル・コンピテンスの習得状況

# コロナ時代における大学授業の国際比較と グローバル・コンピテンスの習得状況

---

# 研究の背景

- ・研究の位置づけ：2022年7月に日本、米国、台湾、韓国、豪州の大学生・大学院生を対象に実施した「大学教育に関する国際比較調査－Withコロナ時代におけるグローバル・コンピテンスの習得と教育経験等に関するアンケート」調査を実施

- ・これまでの研究との関連と背景：GC（グローバル・コンピテンス）を「多様な人々と議論、協働して問題を発見し、解決していくスキルと定義→その習得がコロナ禍においてどのような影響を受けているかの国際比較を2020年に実施し、発表

- ・現在の状況：2022年に文科省が実施した「2022年度後期授業の実施方針に関する調査」結果99.8%の大学等が「半分以上を対面」、98.5%が「7割以上を対面」で行うと回答 全対面を予定する大学等も6割に上るなど対面復帰が日本ではかなり円滑に進捗

- ・他国の状況：本調査の対象国米国はかなり早期からポスト・コロナの日常生活へと復帰している。一方で本研究の一環として実施している米国、台湾等の大学教員へのインタビュー調査では、対面だけでなく、現在もオンライン授業も併用しながら、新たな可能性を模索

# 先行研究の検討

---

Yamada 2022: ほとんどの国は、コロナ・パンデミックが高等教育機関に与えた重大な影響を認識しており、それが学生の価値観や規範に変化をもたらし、世界的なパラダイムシフトを引き起こし、高等教育では、オンライン学習がより一般的に活用

---

山田科研グループの先行調査結果：

---

①GCの習得とグローバルな問題への関心が、パンデミックの間、日本、米国、韓国、台湾で大幅に低下したことが判明

---

②同時に、オンライン式への学生の評価も一定数あり、活用を期待も対象国（日米韓台）の回答学生から検証

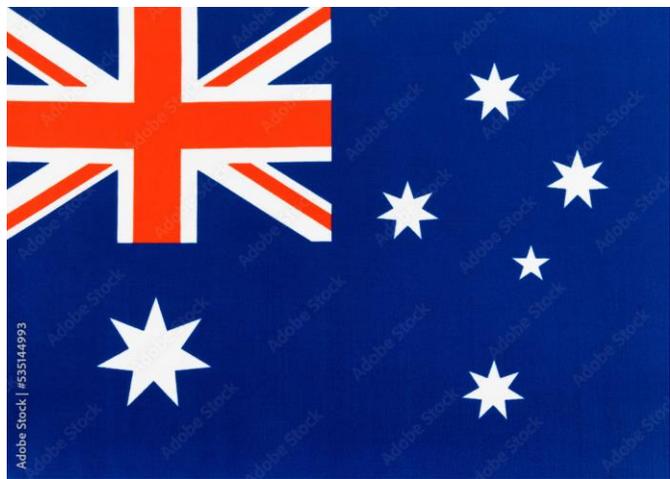
# 問題の設定と研究の目的

---

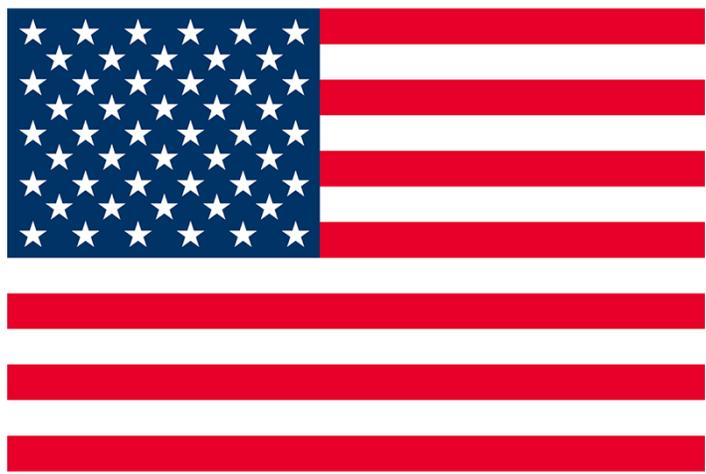
問題の設定：これまでの背景と状況を踏まえたうえで、GCの習得や経験に関連して、Withコロナにおいていかなる状況であるのか、対面式とオンライン方式の活用の度合いとその影響についてはどうなのか、他国ではどうなのかという問い

研究の目的：コロナ禍以降のオンライン学習の活用も踏まえて、コロナ禍から3年目の大学での授業形態の状況、学生の海外経験、グローバル・コンピテンスの学修状況と学修成果、海外や異文化理解への関心等を取り上げ、5か国・地域間の異同を把握すること

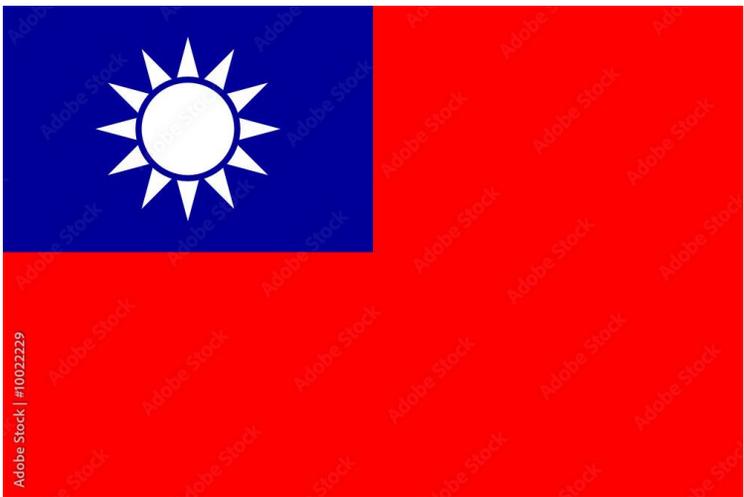
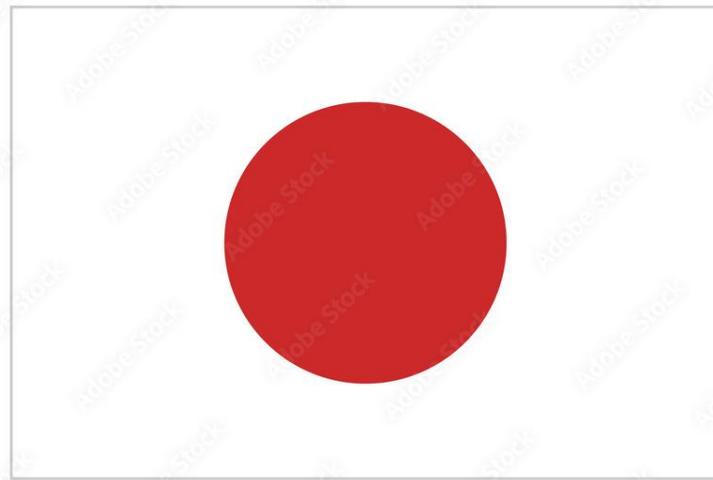
研究の枠組みと対象国の選定：コロナへの水際対策をかなり維持している地域（台湾）とコロナとの共存を目指す国（米国、豪州、日本、韓国）という枠組みを設定し、対象国・地域を選定



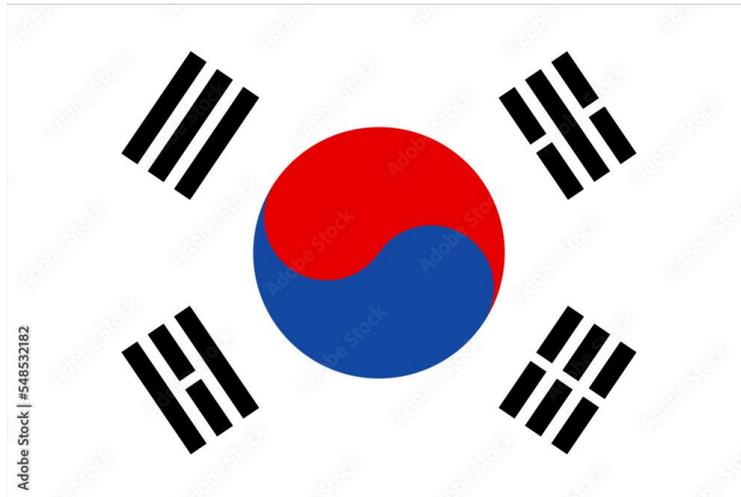
Adobe Stock | #53514993



Adobe Stock | #268269091



Adobe Stock | #10022229



Adobe Stock | #548532182

# 2022年調査概要



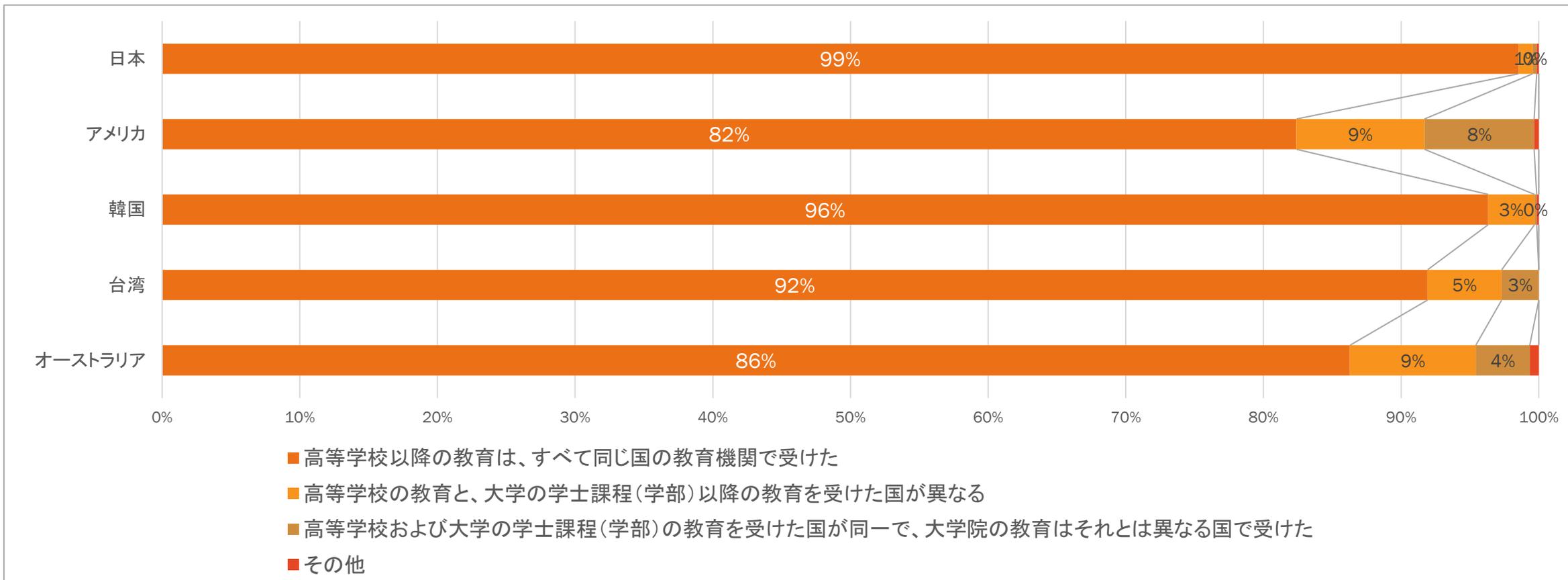
[調査対象] 日・米・韓・台・豪の学生（大学院生含む）  
18-29歳。なお、年齢構成比は各国で  
バラツキあり、  
性別は概ね50:50（豪のみ30:70）

[調査規模] 下記5か国・地域合計で2872名  
（男性1356名、女性1516名）  
（日本：681名 米国：602名 韓国：652名 台湾：631名  
豪州：306名）

[調査方法] ウェブ調査※各国とも全国調査  
（インターネット調査会社経由モニター調査）

[調査時期] 2022年7月

# 各国の属性情報—高校教育及び高等教育を受けた国

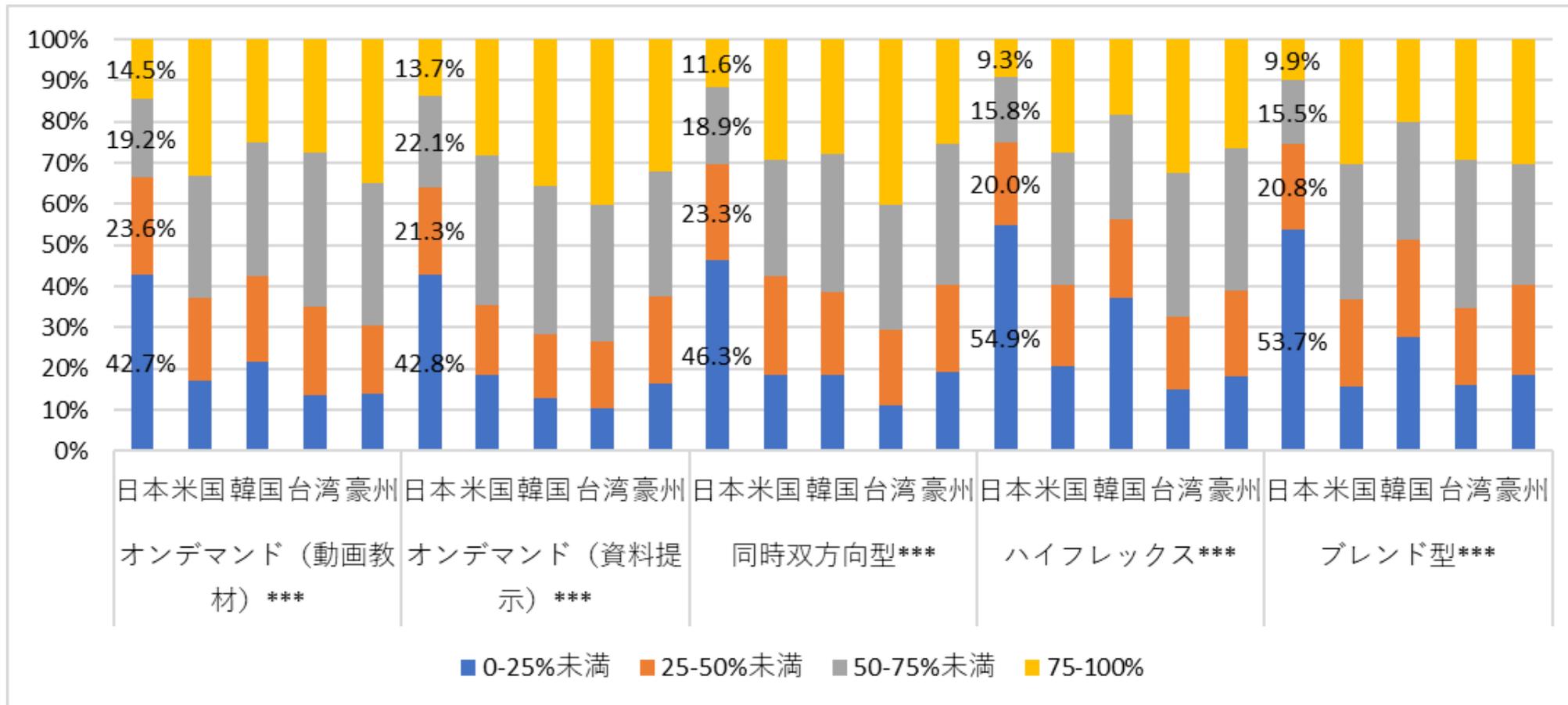


- ・どの国においても最も多いのは「高校以降の教育は、すべて同じ国」
- ・高校までと大学、大学院など高等教育で受けた国が異なるのは、アメリカ（17%）オーストラリア（13%）台湾が（8%）と回答者の1～2割はいる
- ・日本と韓国においては、大学、大学院を異なる国に行ったのはわずかであるが、日本は1%と他国よりかなり低い

---

# 大学での授業形態とそれに対する評価

# 大学生が受講しているオンライン授業の形態



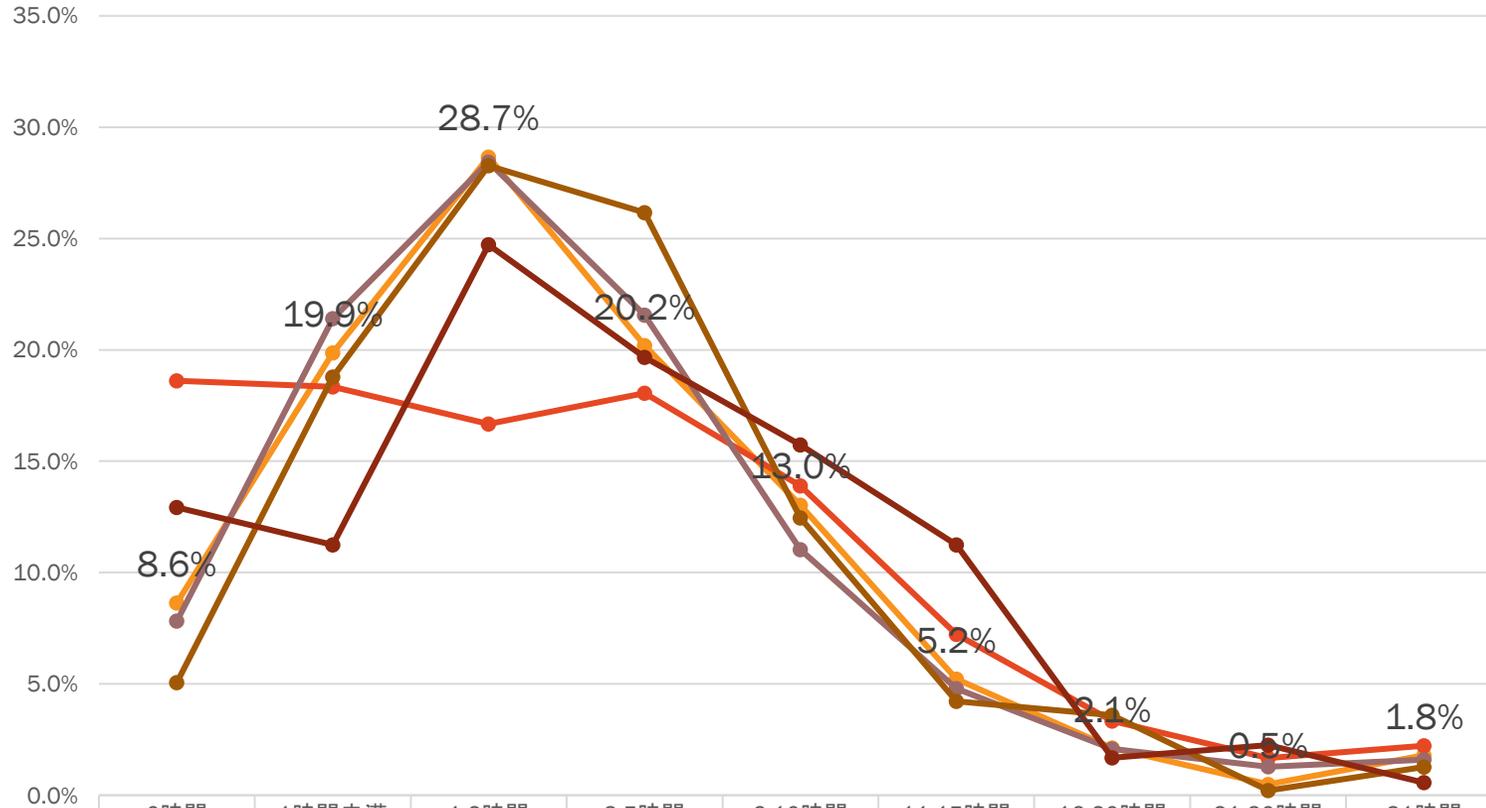
杉谷祐美子作成

- ・どの国もオンデマンド型（動画教材）、オンデマンド型（資料提示）、同時双方向型の3つが中心
- ・ハイフレックスとブレンド型も上記3つに近い割合で、多様な形態をとる
- ・日本の導入率は他国の半分程度
- ・韓国はハイフレックスとブレンド型の導入率は低い傾向

---

学生の活動時間、GCの習得、GCへの関心

# 大学生の1週間の活動時間 授業外学習時間



- ・授業外学習時間は、米国と豪州の大学生の0時間という比率がかなり高く10%台前半から後半

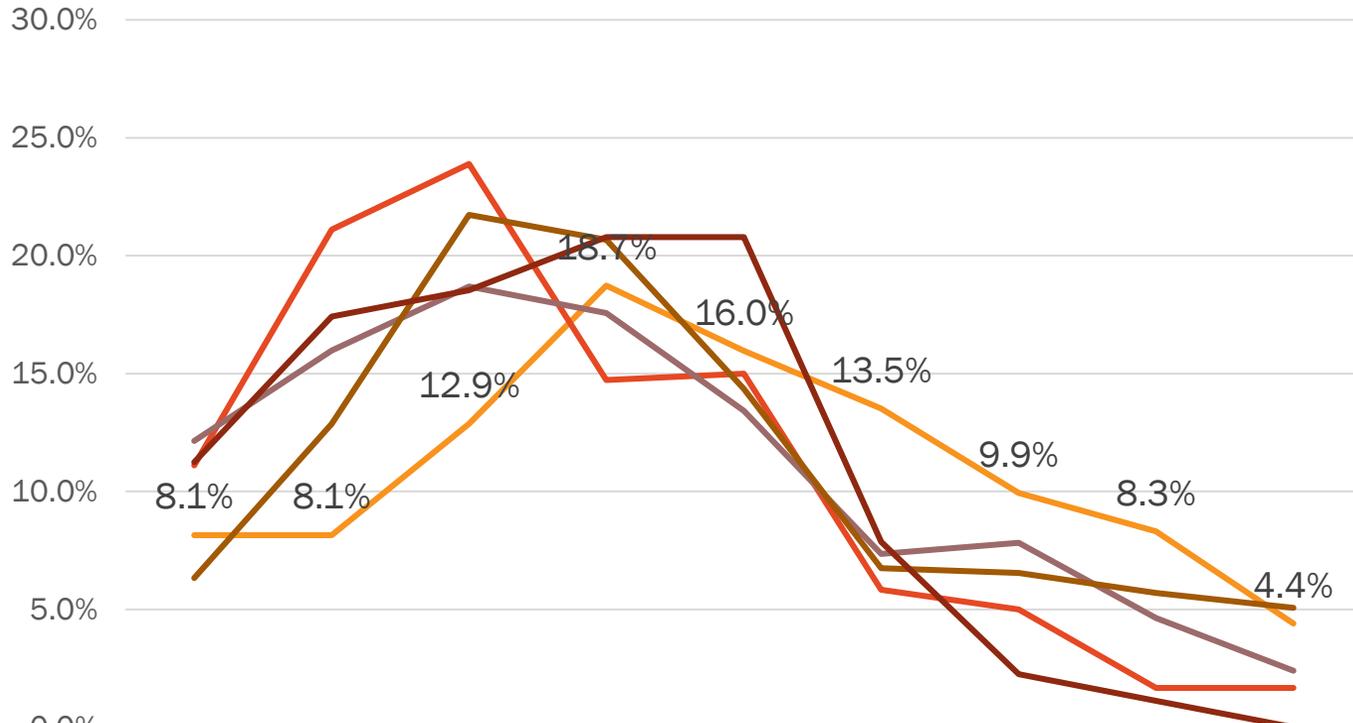
- ・日本、韓国、台湾の学生の比率はいずれも10%以下

- ・10時間以上授業外での学習をする学生の比率は5か国とも類似した傾向

- ・コロナ禍を経て、日本の学生の授業外学習時間は増加・オンライン授業により課題に取り組む学習時間の増加がそのまま継続か

● 日本 ● アメリカ ● 韓国 ● 台湾 ● オーストラリア

# 大学生の1週間の活動時間 授業や実験への出席



— 日本 — アメリカ — 韓国 — 台湾 — オーストラリア

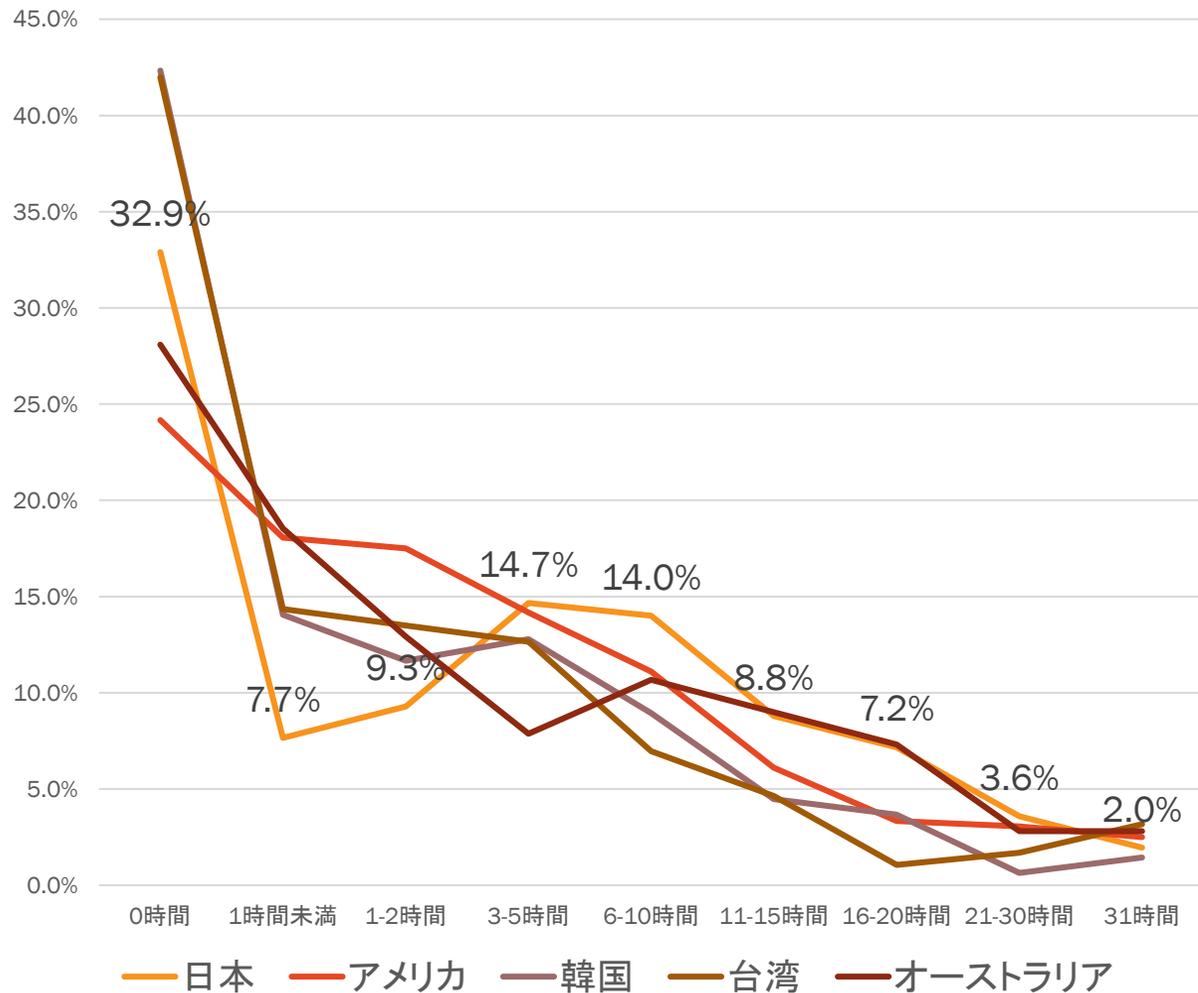
「授業や実験への出席」が0時間と回答した比率が10%を超えているのは、米国、韓国、豪州の3か国 いずれも11%~12%台

- ・ 10時間を超えて出席している比率が最も高い国は日本の36.1% 次に台湾の24.1%

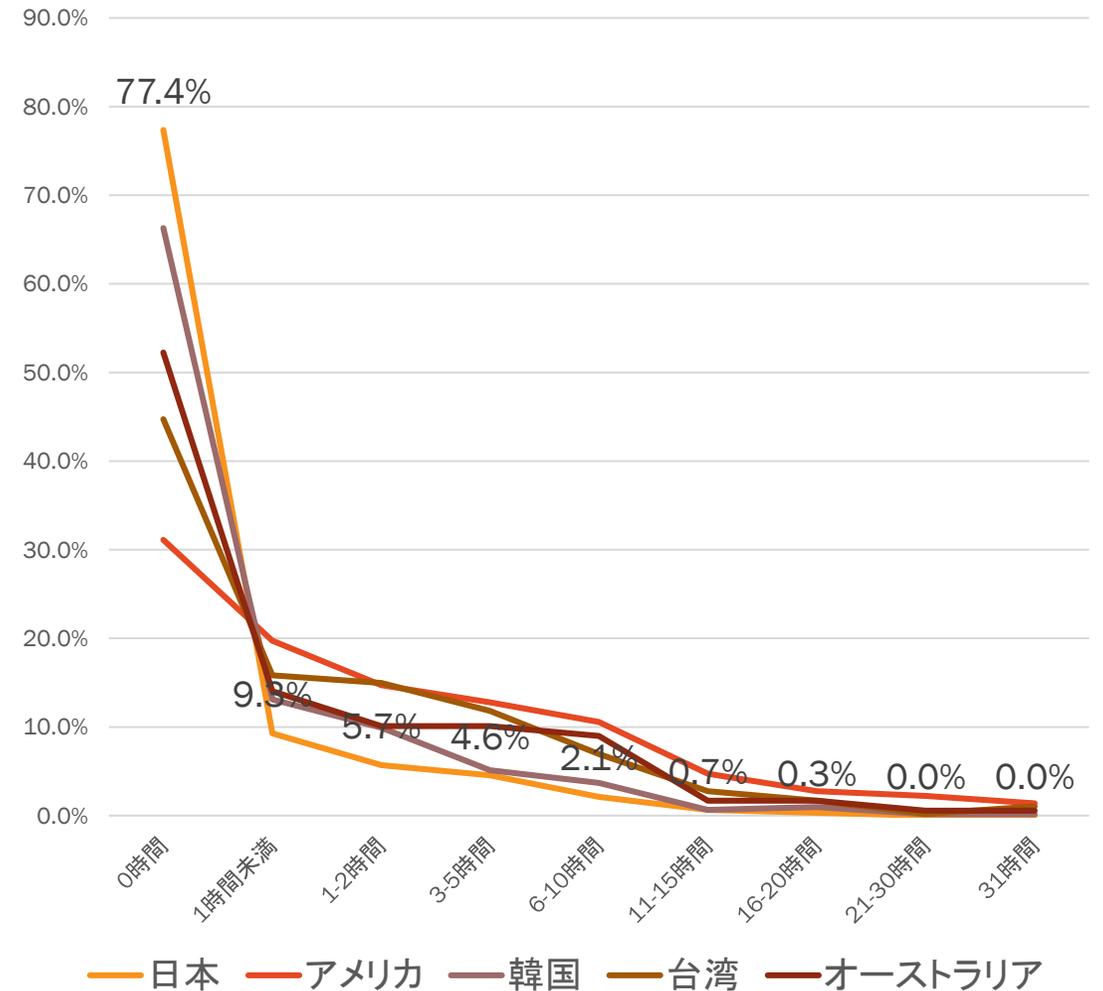
- ・ Withコロナ時代においても対面への回帰によりまじめに授業に出席している日本人学生の姿が浮かび上がる

- ・ 米韓豪の出席時間0はオンライン授業によるためなのか（オンデマンドのためなのか精査が必要）

## 大学生の1週間の活動時間 学外でのアルバイトや仕事

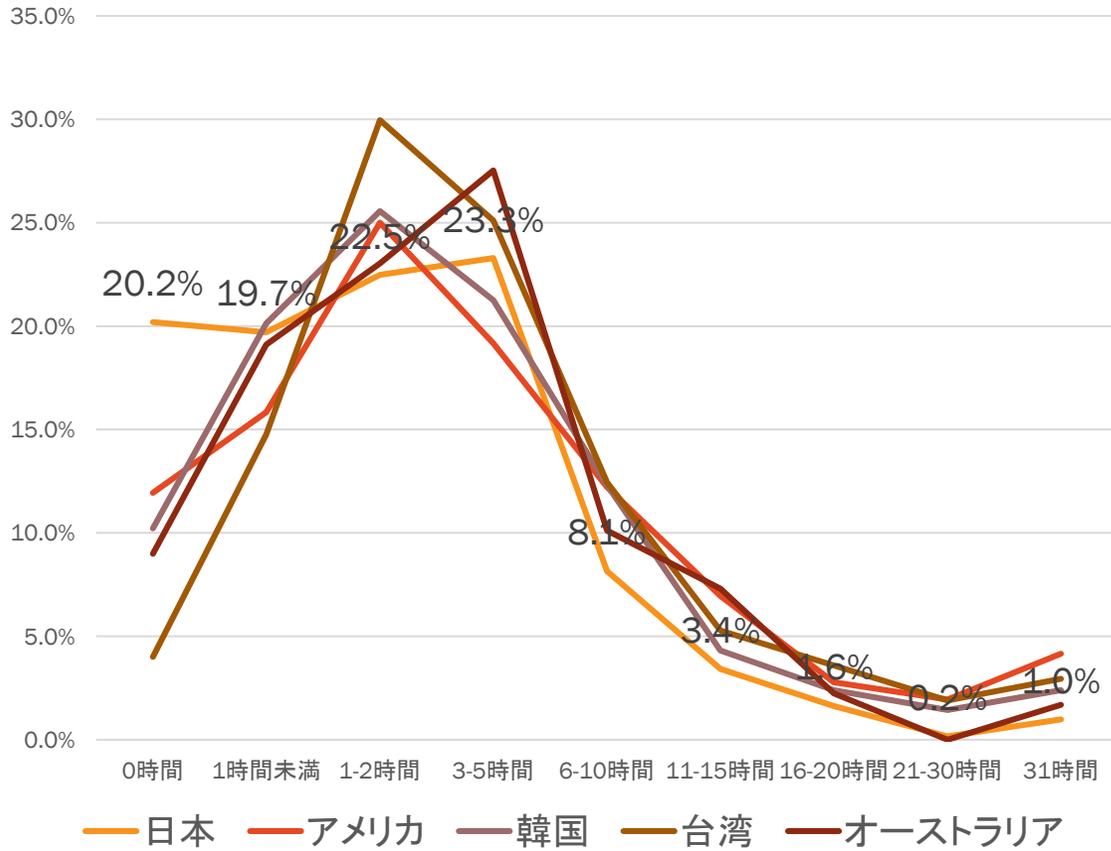


## 学内でのアルバイトや仕事

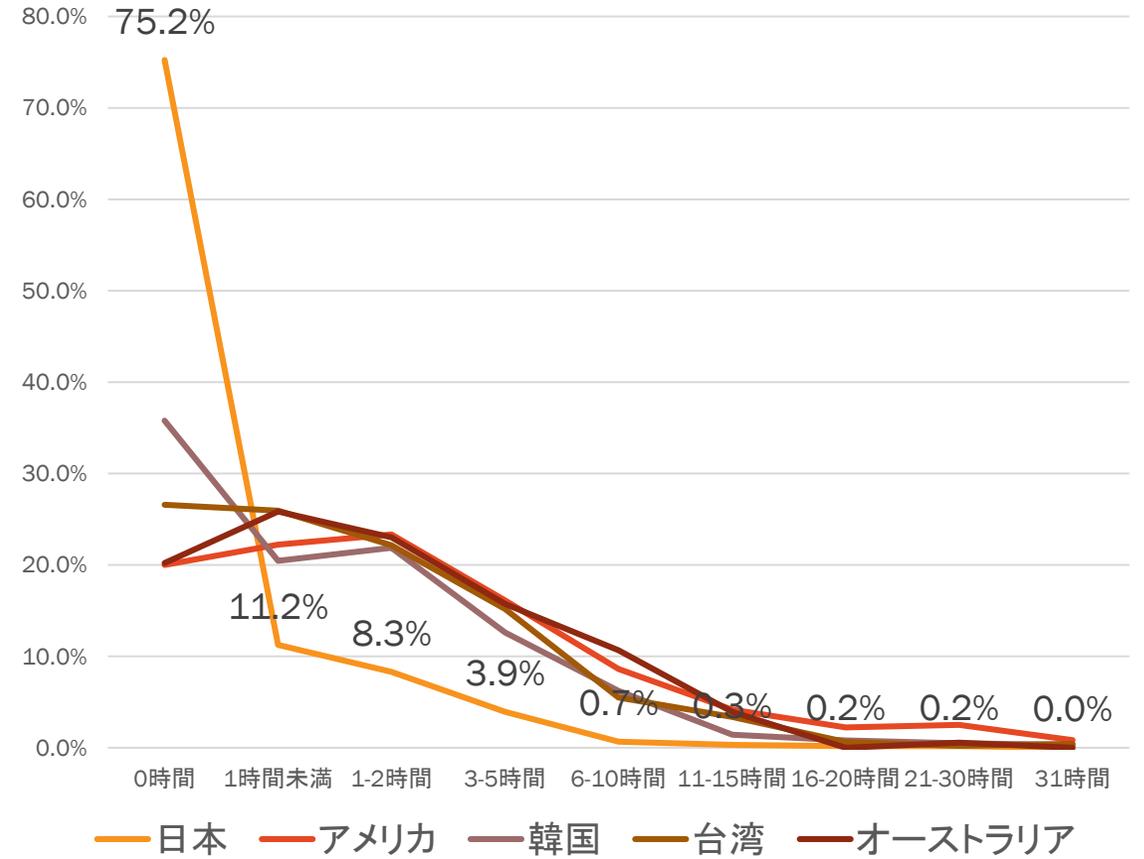


- ・ 過半数の学生は5か国とも学外でのアルバイト時間は5時間未満 日本の学生の学外でのアルバイト
- ・ 時間が若干高い傾向。しかし、学内でのアルバイト時間が圧倒的に低いため、学外に吸収か

## 友達と交際する

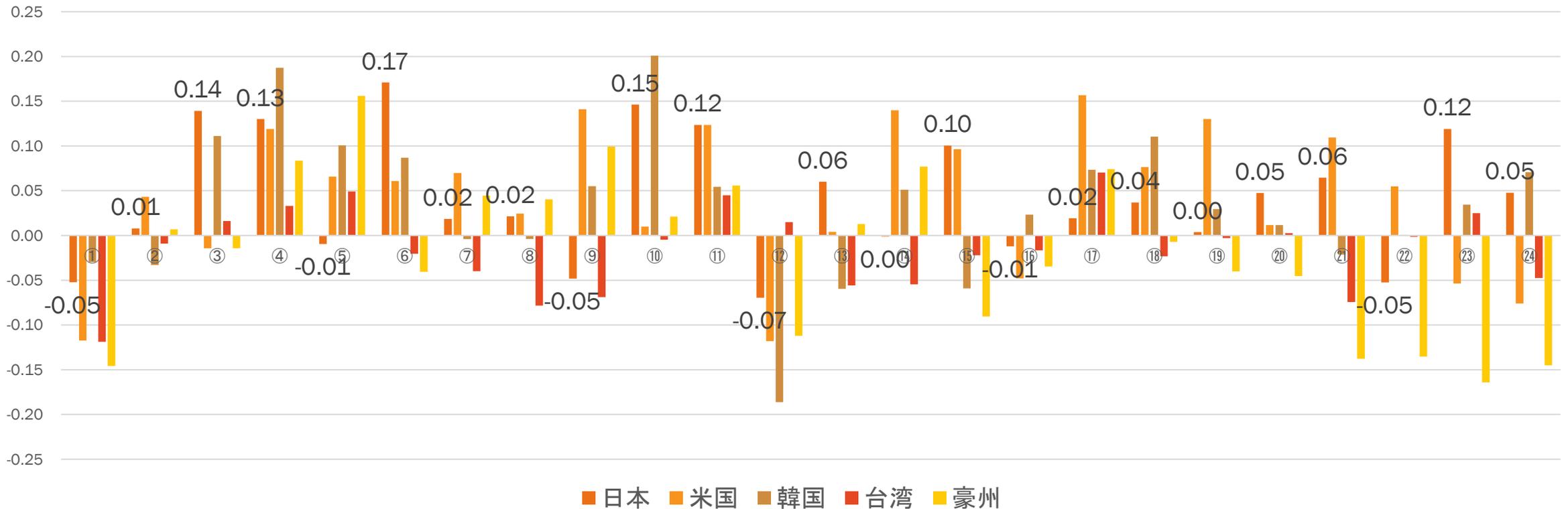


## コンパや懇親会に参加する



- ・友人との交際については、0時間と回答している比率が20%を超えていたのは日本
- ・他の国での0時間回答は4%～11%程度であり、全般的に日本の大学生の友人との交際に費やす時間が少ない
- ・同様にコンパや懇親会に参加する時間が圧倒的に少ないのが日本の大学生
- ・コロナ禍での行動制限が延長して回復していない可能性

# GCの習得状況 2019年と2022年との変化 大学生



質問項目：①異文化の環境でも生き抜くことができる②海外に対する好奇心を持っている③異文化に対して寛容な態度で接することができる④異なる文化背景を持つ人と協働できる⑤異なる文化背景を持つ友人をつくる⑥未知なことや新しいことに対して挑戦する意欲がある⑦異なる文化背景を持つ人と組んで目標を達成する⑧海外のことでも積極的に関わることができる⑨異なる文化背景の人とコミュニケーションをとれる⑩世界に対する広い視野を持つ（グローバルな関心）⑪グローバル規模での持続可能な開発目標（SGDs）に関連した話題に関心がある⑫複数の言語でプレゼンテーションできる⑬既存の事例や研究から新たな視点や考えを生み出す⑭新しい分野や領域の考え方に対してオープンである⑮新しい分野や領域の考え方を取り入れてイノベーションに挑戦する⑯対立する意見や立場が異なる状況を自ら動いて克服する⑰自身で考え判断し、信念を持って自分のできる範囲の行動を行う⑱専攻する専門分野の知識がある⑲専攻する専門分野の知識を応用することができる⑳人文学分野の知識がある㉑社会科学分野の知識がある㉒理工農生系分野の知識がある㉓情報科学分野の知識がある㉔母語以外の言語を運用できる

# コロナ前とWithコロナにおけるGCの習得差

- ・ GCの定義「多様な人々と議論、協働して問題を発見し、解決していくスキル」
- ・ 2022年、2019年の習得度の平均値では日本の大学生の平均値は他の4か国の大学生の平均値よりも相当低い
- ・ GC 習得スコアの増減をみると異なる実態が浮上
- ・ 日本の学生（学部生と大学院生両方）は、パンデミック後のスコアで GCの習得スコアが全般的に向上
- ・ 米国の学生（学部生と大学院生ともに）は、2019年・2022年ともにGC習得スコアは最も高いが習得の増減スコアは比較的低い
- ・ 日本と韓国の増減の傾向は類似
- ・ 日本の学生は後のグローバルな事象への関心でも圧倒的に低い。向上はオンライン授業の教授法や授業での取り組みにより向上した可能性。むしろ、他国の学生がコロナ禍により学修全般にネガティブな影響があったことが影響し、低下した可能性
- ・ 国際比較の場合、日本の回答傾向として他国よりも自己評価が低い結果となり、常にどの程度日本人の自己評価が低いのかを検証する必要性を指摘してきたが、平均値で見るのではなく、異なる比較方法への示唆

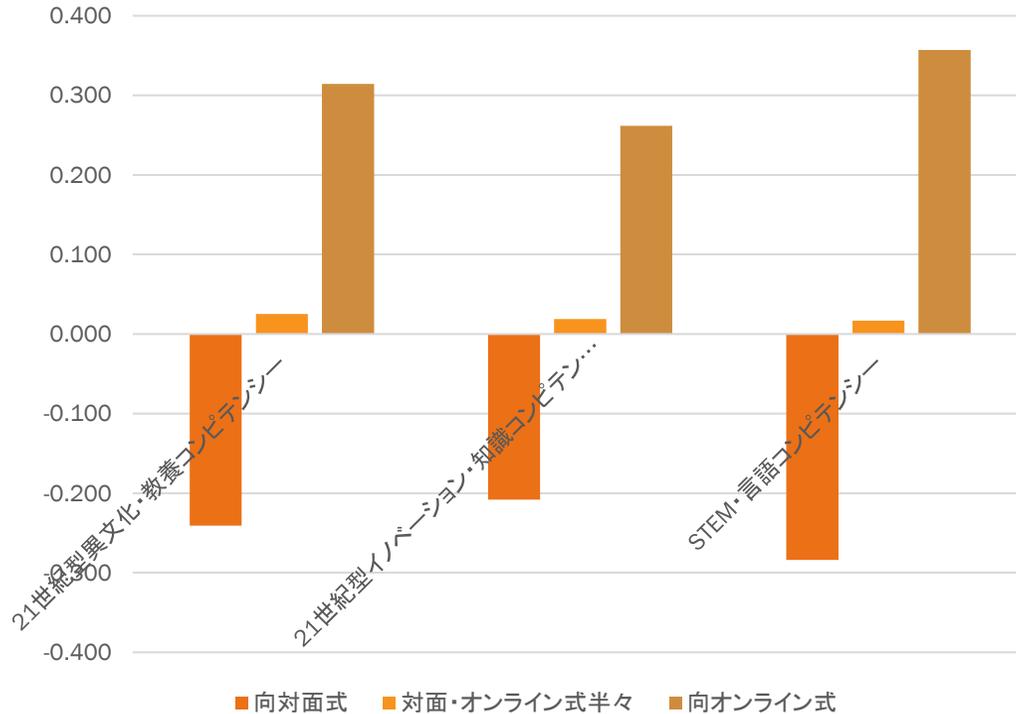
# 現在のGCの習得状況

## 因子分析結果

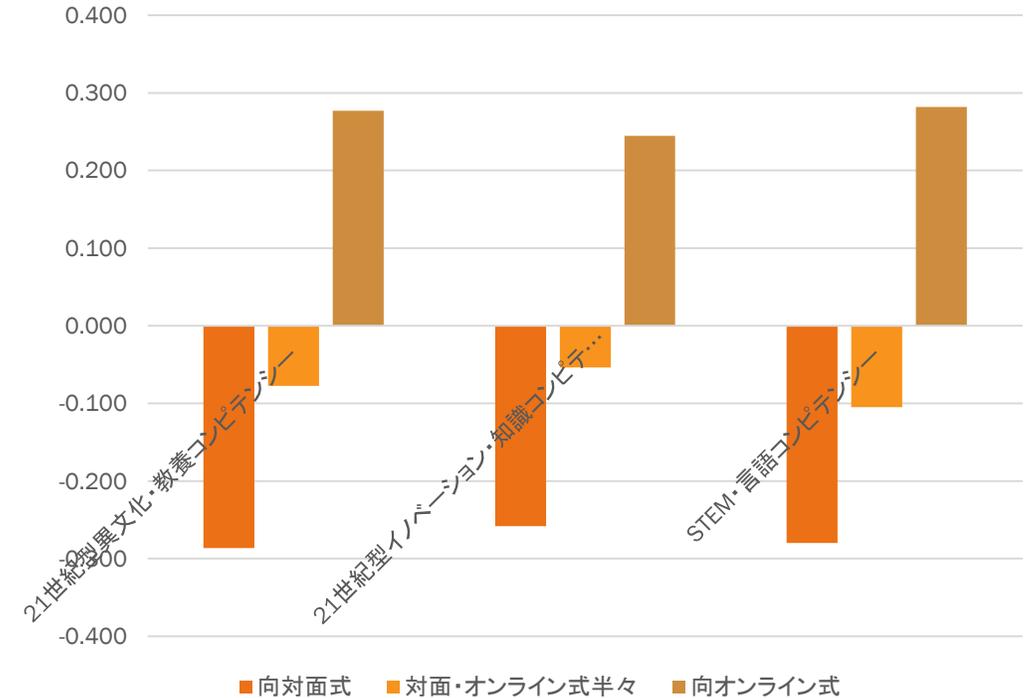
	21世紀型 異文化・ 教養コン ピテン シー	21世紀型 イノベー ション・ 知識コン ピテン シー	STEM・言 語コンピ テンシー
異なる文化背景を持つ人と協働できる	0.818	0.057	-0.124
異なる文化背景を持つ友人をつくる	0.789	0.005	0.005
異なる文化背景を持つ人と組んで目標を達成する	0.773	-0.008	0.051
異文化に対して寛容な態度で接することができる	0.768	0.131	-0.167
異なる文化背景の人とコミュニケーションをとれる	0.708	0.025	0.082
海外に対する好奇心を持っている	0.704	-0.001	0.057
世界に対する広い視野を持つ（グローバルな関心）	0.673	0.155	-0.038
海外のことでも積極的に関わることができる	0.635	0.014	0.168
異文化の環境でも生き抜くことができる	0.569	-0.028	0.265
グローバル規模での持続可能な開発目標（SDGs）に関連した話題に関心がある	0.487	0.148	0.139
未知なことや新しいことに対して挑戦する意欲がある	0.447	0.327	-0.026
専攻する専門分野の知識がある	0.009	0.682	-0.009
専攻する専門分野の知識を応用することができる	0.032	0.676	0.029
自身で考え判断し、信念を持って自分のできる範囲の行動を行う	0.225	0.617	-0.072
新しい分野や領域の考え方を取り入れてイノベーションに挑戦する	0.229	0.506	0.099
新しい分野や領域の考え方に対してオープンである	0.313	0.496	0.001
既存の事例や研究から新たな視点や考えを生み出す	0.209	0.469	0.164
対立する意見や立場が異なる状況を自ら動いて克服する	0.311	0.464	0.023
複数の言語でプレゼンテーションできる	0.168	-0.172	0.794
母語以外の言語を運用することができる	0.154	-0.074	0.681
情報科学分野（コンピューターサイエンス、データサイエンス、AI等）の知識がある	-0.206	0.364	0.539
理工農生系分野（理学、生命科学、農学、工学、医学等）の知識がある	-0.225	0.358	0.519
因子間相関	1.000	0.746	0.646
		1.000	0.609
因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法 55.787%			

# 教室規模による授業方法別GC習得状況分散分析結果

授業方法別GC習得度 少人数教室



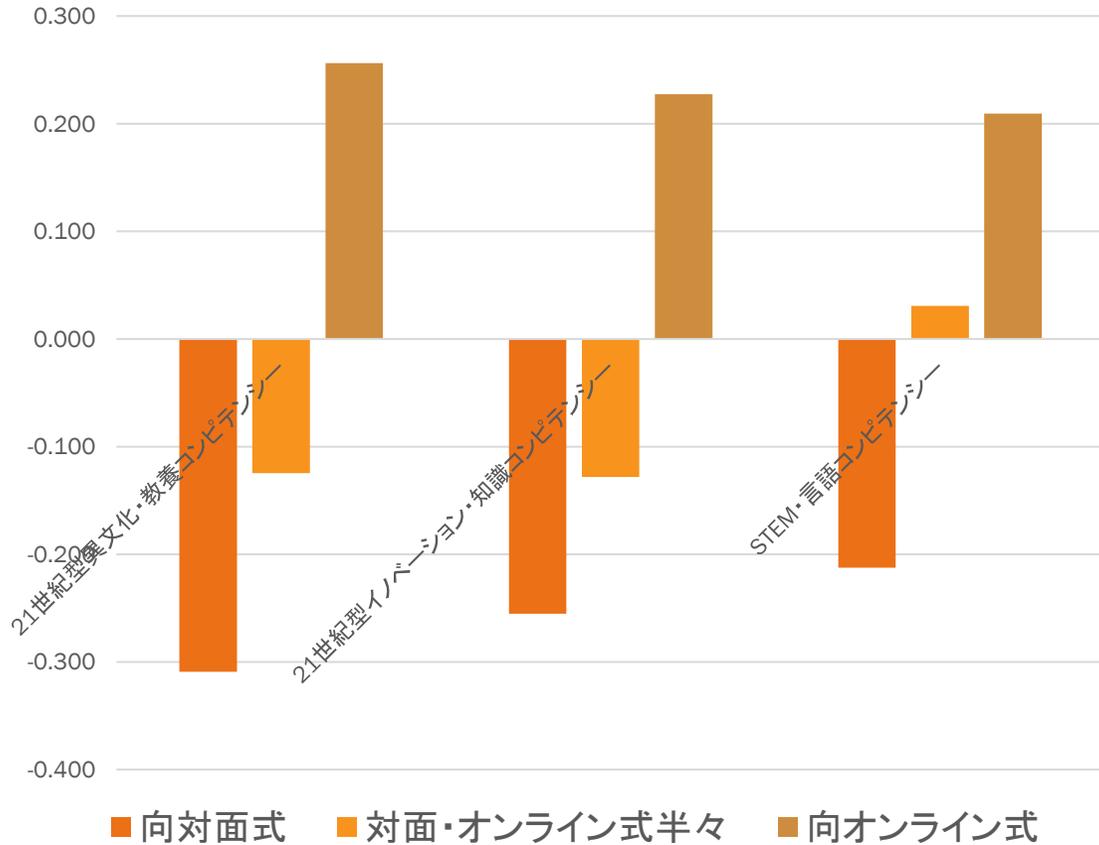
授業方法別GC習得度 中規模教室



- ・ 21世紀型異文化・教養コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意
- ・ 21世紀型イノベーション・知識コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意
- ・ STEM・言語コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意

# 教室規模による授業方法別GC習得状況分散分析結果

授業方法別GC習得度 大規模教室



・ 21世紀型異文化・教養コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意

・ 21世紀型イノベーション・知識コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意

・ STEM・言語コンピテンシー 向オンライン式>対面・オンライン式半々>向対面式 Tukey 法 0.001で有意

5か国全体で見た場合、教室規模にかかわらず現時点でのGCの習得度と対面、対面・オンライン併用、オンライン活用とのレリバンスは、オンライン活用がGC習得状況に高効果を与えている

# 2022年調査の まとめと課題

- Withコロナ期において5か国を対象にした学生調査の一部の結果から、日本が5か国の中では対面式の授業の活用度合いが高いこと、台湾や米国ではオンラインが積極的に活用されていること、1週間の活動時間では、日本が従来指摘されてきた授業外学習時間の短さがコロナ禍を経て改善されたのと対照的に、米国や豪州は学習時間が0時間と答えている比率が日韓台よりかなり高い等の差異を確認した
- GCの獲得に必要と思われる能動的・協働的な学びの機会 は、日本では対面式・オンライン式を通じて不足しているのに対して、特に台湾や米国ではオンラインを活用しながら効果的に取り組んでいる可能性が示唆される。日本も授業形態の特性に応じて、授業内容や授業方法を工夫しながら能動的・協働的な学びの機会の提供がより求められるのではないか
- GCの獲得度は、日本の平均値は5か国で比較して低い がコロナ以前と現在を比較した場合の習得スコアの向上が確認できることから、授業外学習時間や授業への好意的な評価が関連している可能性もある。これらの関係性をより精査する必要がある

# アフターコロナにおける大学授業の国際比較と グローバル・コンピテンスの習得状況

---

## 問題の設定と研究の目的

---

他国はオンライン教育を新たな方向性として活用する方向にあるが、日本は対面式に回帰している。オンライン教育の活用とGCの関連性はどのようなのか？



- ・ GCの習得状況、学習状況とオンライン教育との関連性について2022・24年調査の比較から検討する
- ・ これまでの調査からの知見として、日本人学生の回答傾向と自己評価の関係について検証する

(これら2つの内容は杉谷・白川の発表に譲る)

# 分析対象

大学と大学院では授業の規模や環境等が異なることから、サンプルの均質化のため、大学生のみを抽出。

各国の大学生の回答者数（大学院生・大学生の合計に占める比率）

<2024年調査>

日本536名（86.7%）、米国396名（61.8%）、韓国570名（91.9%）、台湾464名（76.4%）、豪州248名（74.0%）、合計2214名（78.5%）

2024年の大学生比率は、日本、韓国が若干少なく、豪州は多いが、全体としてはほぼ変わらない

## 全体を通しての論点

---

- 2022年調査と比較して、2024年にはどのような特徴がみられるのだろうか
- オンラインの活用度、GCの習得やGCの経験や関心、そして活動時間には変化があるのだろうか
- 国際比較の結果をどこまで検証できるか
- 日本人の回答傾向：これまでのところ、中庸にマークする傾向が強い。日本人の中庸にマークをする傾向は明白だが、これから見ると日本人の自己評価の低さをどう考えればよいだろうか